文系・理系の大学生のためのキャリアデザインの考察と社会的意義

中村　　博

概要

文系と理系の大学生の特性と傾向を踏まえ、その双方の考察を基に、何故、今、双方の学生にキャリアデザイン(人生設計)が必要とされるのか、これらの問題提起と解決策について私見を基に論じていきたい。

福山大学は5学部・14学科を擁する、中国地方有数の総合大学である。

筆者は、福山大学キャリアセンターの新設に携わり、本学の初年次教育として、1年生全員が履修する必修科目「キャリアデザインⅠ」が開講されてきたことから、同センター新設当初から、文系と理系の学生のキャリア教育に取り組んできた。

その授業目標は「人間力」（豊かな人間性）の育成と、「社会人基礎力」の研鑽を積むことにある。

福山大学は、「信頼と愛に基づく人間関係を育む〈心情と愛の教育〉、人の生命を尊重し自然を畏敬する〈人間と自然を尊ぶ教育〉、理論と実践をつなげる〈知行合一の教育〉により、豊かな人間性を基盤に調和のとれた人格陶冶を目指す「全人教育」を教育理念としており、入学初年次の全学必修科目「キャリアデザインⅠ」は、この教育理念を念頭に開講されている。

「キャリアデザインⅠ」の授業においては、文部科学省の助成金で作成した教科書を有効に活用し、系統的キャリア教育の講義を基本とし、担当教員のこれまでの国内外におけるキャリア・経験から、上述の教育理念に沿う学修内容も取り入れ、さらに、アクティブラーニングとして、学生の主体性・モチベーション高揚のために、対話形式、事例研究、質疑応答、各自学生のWORKに基づく自己のプレゼンテーション、グループディスカッション等を積極的に導入している。その結果、自己の「生き方」がこれまでの高校生活や大学入学当初の期間と比較し、従来のただ無意味に流されるライフスタイルから、毎日が目的意識を持った有意義な時間の使い方にみるみると変化していき、自分自身でも驚くほど自己実現への道を歩み始めた事に、ほぼ全員の学生が喜びを感じている姿が顕在化している。

上記の事柄は、平成30年度本学の前期定期試験（以下、H30前期定期試験）において、経済学部の「キャリアデザインⅠ」の試験を受験した、経済学部1年生(約275人)の答案用紙、並びに、平成29年度本学の後期定期試験（以下、H29後期定期試験）

において、生命工学部の「キャリアデザインⅠ」の試験を受験した、生命工学部１年生(約 192 人)の答案用紙からも検証できる。

文系と理系の学生の違いの一つに、理系では学部生のときの専攻分野を活かせる就職先を志向する傾向があり、企業側も理系学生の採用には「専門性」を重視する傾向が強い。一方、文系では学部生のときの専攻分野が、就職先につながるケースはそれほど多くみられず、言いかえれば、文系の学生の専攻分野は、就職先の企業が新卒の学生に求めるエンプロイアビリティー（雇用されうる能力）と、直接の関係性は強くないと換言できよう。

このように文系・理系の学生を取り巻く就職事情や、双方の学生の進路希望に相違は見られるものの、H30 前期定期試験・H29 後期定期試験の結果から、双方の学生について、次の共通の事柄が理解できる。

従来の高校までの学校生活においては、学校での学びが将来どのように社会で役立つのかという視点の教育はなく、故に、これまで自己の将来像や「自分を知る」事の大切さを考えたこともない大学１年生の姿が浮き彫りとなっている。そして、「キャリアデザインⅠ」を受講後、一人前の社会人になるために大学時代に何をなすべきか自問自答した事、“Time　is Money.”（時は金なり）の如く、これからの有限な大学生活で自己の未来への道をどのように創るのか、自己の貴重な人生にとって本質的に何が大切で何をなすべきか、今後、PDCA サイクルを活用し小さな目標から着実に達成させていく事の肝要さなどを自覚できた事が、ほぼ学生全員の答案用紙に、真摯に且つ意欲的に記されている。

このように文系（経済学部１年生）、及び、理系（生命工学部１年生）の学生を対象に、授業目標の成果が問われる、H30 前期定期試験、及び、H29 後期定期試験において、双方の学生数、合計約 467 人の１年生が解答した答案の論述内容に関する事実が、「文系・理系の大学生のためのキャリアデザインの考察と社会的意義」の証左といえる。

キーワード：自己の将来像への夢・目標、『自己の意識改革』（スピリット・イノベーション：筆者の造語）、能動的キャリアデザイン、戦略的思考術、アクティブラーニング、ビジネス能力検定、社会的強み、人間力、国際社会の動向に乗り遅れる日本の大学教育

１．はじめに

なぜ今、福山大学においては文系・理系の学生の初年次教育として、「キャリアデザインⅠ」を１年生全員の必修科目にしているのであろうか。

そこには、18 歳人口減少の影響により、2008 年春に「大学全入時代」が到来し、

本学のみならず日本の多くの大学が入学生の確保に奔走している現在の社会環境がある。その結果、大学は入学してくる学生の多様性の課題に直面している。彼らの大半は、自己の将来像への明確な目標を持っておらず、大学時代に何を学修すべきか目的意識もないままに、取りあえずモラトリアム（猶予期間）として大学に入ってから何かが見つかるであろうとの、受け身の姿勢で入学してくる者も多いので、大学としてはこのような学生への対応が大きな課題となっている現実がある。

このように高校時代の延長として、大学に入学してからも変化のない学校生活を続ける学生にとっては、高校までの教員主導の受動的学びから、大学に入学後は、自分が主体的に学び、自己の将来像への夢・目標を念頭にした能動的キャリアデザイン、換言すれば、『自己の意識改革』（スピリット・イノベーション）が、どうしても自己の豊かな人間形成に必要であることに気づかせることが肝要である。

これは学生個人の生涯にわたるキャリア構築に、戦略的思考を持たせ、日々の生活に明確な目的意識とメリハリを持たせることにもつながる。

一方、この論文のテーマである文系・理系の学生のためのキャリアデザインについては、文系・理系の学生間で、大学における授業への取り組みや、卒業後の進路・就職に関し、それぞれの思考の特性や傾向の相違点が考察できる。

授業に関しては、文系の学生は学業で専門知識を探求しようとする傍ら、自分の専攻分野が卒業後の進路や就職先にどのようにつながるのか理解し難く、先ずは資格取得や、クラブ・サークル・ボランティア・アルバイトなどに着手したい傾向が比較的に見られる。理系の学生は自分の専攻分野の専門知識を得て、専門性を探求しようとする志向が強く、物事をできるだけ数値的に捉え、幾分論理的に理解しようとする傾向もある。

そして、21 世紀の今日、世界がグローバル化へ著しく進行していく最中、これまで日本の地域社会において若者が抱いてきた「価値観」や「考え方」が、このグローバル化していく世界においては必ずしも通用しない時代が到来している事が指摘できる。

このような時代背景から、平成 30 年度に本学経済学部に入学した 1 年生にとって、並びに、平成 29 年度に本学生命工学部に入学した 1 年生にとって、必須のことは、彼らが自己の生涯を「キャリアの積み重ね」、即ち「ライフ・キャリア」として把握し、キャリアとは大学、家庭、社会、人生におけるそれぞれの役割の全てであり、卒業後の職業・キャリア選択については、学生個人の望みを満たすことだけではなく、「自己と社会の双方に存在意義をもたらす仕事」として洞察する事が重要である。そして、これからの学生個人のキャリア選択とその連続性は、自己の「生き方」と人生の充実度に大きな影響を与えるというキャリアデザインの本質を、福山大学の必修科目「キャリアデザインⅠ」の授業を通してしっかりと学修し、受講生全員がその本質を自ら主体的に自覚してもらうことである。

本論文では、グローバル化時代への推移とともに、「生き方」や価値観の多様化している学生が、どのように能動的にこの「キャリアデザインⅠ」の講義に取り組むことが、自己の将来像への夢・目標に向かって主体的にキャリアを構築していくことにつながるのか、そのためには自己の意識改革（スピリット・イノベーション）を礎に、どのようにPDCAサイクルやキャリア・カウンセリングを活用し、学内外でどのような活動に挑戦し続ける事が、大学時代に自己の豊かな人間形成を成し遂げていくことにつながるのかということを問題提起し、その処方箋について論じていきたい。[1]

２．戦略的思考術

大学生活のときから、一人一人の学生のキャリア構築が実を結ぶためには、そのキャリア構築のプロセスにおいて、戦略的思考法が必要となる。それは、最初に、これから自分が成すべきことの「目標」を見つけ、その「目標」である階段の上のゴールをいつまでに、どのような方法・戦術で成し遂げていけばいいのか、「現状」から「目標」に辿り着くための道筋や手段を考え、階段を上っていくプロセスの思考法であり、これが「戦略的思考術」である。これは、受験戦争で、高校生や中学生が日々の継続的学習努力で、入学試験で合格を果たす、受験生活のプロセスとは、異質のものである。

しかし、経済学部１年生のH30前期定期試験や生命工学部１年生のH29後期定期試験の答案には、まだ、明確な「目標」が見つかっていないと解答した学生も多い。

ここで文系と理系の学生にとって、就職活動を事例に取り上げ、双方の学生の特性・傾向について考察したい。

福山大学経済学部には、経済学科、国際経済学科、税務会計学科の３学科がある。この３学科の１年生全員対象の必修科目「キャリアデザインⅠ」において、昨今、文部科学省後援のビジネス能力検定ジョブパスの公式試験対策を、授業の一部に取り入れている。これは、まさに「社会人基礎力」育成のために部分的に導入しているもので、一人一人の学生に、大学生活と社会生活は本質的にどこが違うのか、入学後の早い時期からその相違を自覚してほしいという目的意識のためであり、その試験対策が大勢の新入生にとって学校生活と異なる実際の社会生活を知る上で有益と判断され、さらに、最初の資格取得への合格が、自分自身に大きな自信をもたらすからである。

一方、生命工学部には、生物工学科、生命栄養科学科、海洋生物科学科の３学科がある。この３学科の１年生全員対象の必修科目「キャリアデザインⅠ」においては、ビジネス能力検定ジョブパスの公式試験対策は無く、文部科学省の助成金を使用して、

---

[1] 中村博(2018),「大学生のためのキャリアデザイン(人生設計)とキャリア・カウンセリングの社会的意義」『福山大学経済学論集』第42巻第1・第2合併号,pp.67-69.

福山大学で作成した教科書を活用して、経済学部１年生と同様に、系統的なキャリア教育を展開している。

文系・理系双方の学部の１年生の就職希望先については、経済学部生は、企業への就職希望が最も多く、業界は幅広く、金融機関が人気である。一部の学生が地方公務員（教員、市役所職員、警察官、消防官など)、大学院への進学を希望している。

生命工学部生は、学業の専攻分野と直結する、大学院への進学を希望する学生もいる傍ら、企業への就職についても、例えば、食品会社への就職希望者が多く、自分の専門知識を活かせる職種として、品質管理、研究職、製造管理、商品企画などへの関心も高い。ワインづくり、発酵食品、小学校の食育の教師、水族館、人工養殖、釣具店、農業などへの希望者もいる。

就職については、OECD 先進諸国の中で、日本だけが新卒一括採用という独特の採用形態を取っており、その分、限られた時間の中で就職活動を終わらせる必要もあり、成果を出せなければ、就職浪人、フリーター、ニートなどになっていく可能性もある。

入学後、文系・理系の１年生ともに必修科目「キャリアデザインⅠ」の授業において、大学と高校の授業への取り組みについての相違点である、受動的ではなく、主体的・能動的学修への自己の意識改革（スピリット・イノベーション）が求められる。

大学１年次の４月・５月・６月・７月の期間に、なぜ、自己の将来像を見据えた、自己のキャリア構築のために、上記の『戦略的思考術』が肝要なのか、学生一人一人に理解を促し、自覚してもらうことに傾注して、キャリアデザインの授業を展開している。

同時に、大学時代は、“Time　is　Money”の如く時間が有限であり、自己のキャリアデザインにおいては、残された大学生活における、限られたこの貴重な時間を、日々、どのように自己の将来像に向かって有効に使うのか、これこそが自己の人間形成、「人間力」育成にとって重要な決め手になることを説いている。

３．文系・理系の学生は「キャリアデザインⅠ」の授業で何を学ぶのか

大学に入学した文系・理系の１年生は、「キャリアデザイン」という新しい考え方を知る。

先ず、学ぶのは「あなたの人生の主人公はあなた自身である」ことの認識である。誰かの指示や教えに従うばかりでなく、進むべき道を自分で発見し、そのためにやるべきことを考えることで、「主体性」が身につくはずだ。

この授業を通して、大学や課外活動を通じた学びの方法、社会でのさまざまな働き方についても知ることができる。同時に、自分自身を見つめ、「私は何がしたいのだろう？」「私にできることは何だろう？」と、将来の自分の『生き方』を考える作業を積み重ねていくことができる。そして、自分の目標を設定し、達成に向けて何をすれば

いいか考え、行動計画を立てる段階にまで到達することになる。

いよいよ本当のチャレンジが始まるのだ。頭の中に描いた計画を行動に移そう。いくら机の上で理想の道筋をイメージしても、前に向かって走りださなければ、立ちはだかる壁を乗り越えていくことはできない。

行動を起こしたものの、目標とのギャップの大きさに悩んでいる人も出てくるだろう。目標とはあくまでも現時点での仮説である。どんなに緻密に考えても、実際行動してみると、計画段階で見えなかった困難に行く手を阻まれることがある。その際は、改めてその時点で最善策を考えよう。重要なことは、実際に行動を起こすこと。「優れた行動計画を立てること」が目的になっては本末転倒。先ずは行動し、試行錯誤を繰り返しながら、よりレベルの高い目標を目指していこう。

大学生活でも社会でも、目標設定→計画→行動→達成のプロセスは一度で終わるものではない。行動した事を検証し、より良くするために再チャレンジする。その繰り返しが重要。

最初の試みは失敗することが多い。しかし、大切なのは、失敗から学ぶこと。失敗した者は、実はそこで貴重なものを手に入れている。それは、「このやり方ではうまくいかない事が分かった」という経験。逆にいえば、最初に計画を立てる段階では気づかなかった「別の方法」という新たな可能性を、失敗が教えてくれる。たくさんチャレンジした人とは、換言すれば失敗から多くを学んだ人。こういう人こそ、成功に近づいていると言える。失敗を恐れず、どんどんチャレンジしていこう。

最初に立てた計画を思い出し、何をしようと思ったか？ そのうち何ができたか？ 何ができなかったか？ 失敗の原因は？ と立ち止まって、じっくりと考えてみる「振り返り」もキャリアデザインには不可欠な要素である。

振り返りは、これからの大学生活を考えるための出発点になる。振り返りがあるからこそ、「〇〇ができたから、次のステップを目指そう」「できなかった□□のために、もっと時間を割いて取り組もう」という思いが出てくる。新たな目標を見つけることで、自分が成長していることを実感できる。

成長への実感は自信につながり、新たなチャレンジに踏み出す際、前向きに取り組む力になる。もちろん、大学生活において、成功体験ばかり続くことはないだろう。むしろ、失敗の方が多くても不思議はない。成功しても、失敗しても、体験を振り返り、成長を実感している人は、自信を持って「またチャレンジしよう」と考えることができる。計画、実行、達成、失敗、振り返り、修正、そして成長の実感、これらを繰り返しながら、人は自分の「強み」を発見し、自信を形成していくことができる。[2]

---

[2] 福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career Design Note I Fukuyama University』福山大学キャリア形成支援センター,P.52-53.

チャレンジを続けることで、自己の成長につながる「鍵」が見つかるのだ。

４．自己のキャリアデザインで伸ばしたい能力

H30 前期定期試験、及び、H29 後期定期試験で、「キャリアデザインⅠ」を受験した文系・理系の学生の解答から、学生が自己のキャリアデザインで伸ばしたい能力として、以下のものを挙げている。

H30 前期定期試験（経済学部１年生）：

① 私は高校時代から、将来高校の保健体育の教員になりたいとなんとなく目標がありました。でも、教員になるために何が必要で、何が不必要か、分かりませんでした。大学入学後、必修科目「キャリアデザインⅠ」を受け、最初は何の授業か分からず、その後、目標を決めて日々生活することの大切さが分かりました。授業を受けて、先生のように生徒一人一人に対して熱く考えられて、生徒自身が自分で考え発言していけるような教師になりたいと思います。英語の上手な先生を見て、最低でも英検準２級を取り、海外に 1～2 年留学して積極的に英語に触れあいたいです。スポーツ心理学の他、さまざまな心理学を学び、自分の生徒がいつどんな時に何を思うかによって、かけてあげられる言葉や対応を的確にやってあげることで、その生徒を上へと導いていきたいです。授業で披露して頂いたグループディスカッションも人と交わり、色々な事を考え議論し合い解決策を導いていく、とても素晴らしいものでした。私は体育の授業を将来やることになっても、体を使い、生徒一人一人に考えさせ、「考える力」を身につけることができる生徒を１人でも社会に輩出していきたいと考えています。そういった人が１人でも多く社会にいると今の経済を少しでもより良くしていける気がします。キャリアデザインを受けて自分の考え方が 180°変わりました。本当に感謝しています。

② 私は将来、日本テレビのアナウンサーになりたい夢がある。理由は、今の若い人たちは日本や世界の経済活動にあまり興味を持っていないと感じたからだ。そこで、私は自分がアナウンサーになって世の中のできごとを分かりやすく報道することで、若い人たちを引っ張っていけるようにしたいと考えた。自分でも大きな夢だということは自覚しており、アナウンサーになるために必要なことを調べれば調べるほど不安になっていた。そんなとき、キャリアデザインの講義を受け、「PDCA サイクル」を知った。また、目標に期限を決めることが大切だと気づいた。私は夢をしっかりと持ち、必要な情報を集めている方だと思っていたが、目標に期限をつけていないことに気づくことができた。そこで私は、全ての目標に期限をつけた。大学１年生終わりに

TOEIC を受ける。2 年生前期に HSK 検定を受ける。夏休みに中国へ留学する。2 年生冬休みに TOEIC を受ける。2 年生終わりに TOEIC と HSK 検定を受ける。3 年生夏休みには東京で行われる日本テレビアナウンサーになるための研修に参加する、というものだ。また、生きていくうえで学力だけでなくコミュニケーション能力が重要なので、1 年生終わりまでに、先輩などの年上の人とも上手く話せるようになること、２年生終了までに、年上の人との良い関わり方を身につけたいと考えている。さらに、アナウンサーは大勢の前で話す職業なので多くの人の前でも落ち着いて自分の能力を発揮できる力も、２年生終了までに身につけたいと考えている。私は鹿児島の離島出身のため、あまり多くの人の前で話す機会がなかった。しかし、キャリアデザインの講義で皆の前で発言することが増え、最初は手が震えるほど緊張していたが、３度目くらいからは周りが見えるぐらいまで自分の能力を伸ばすことができた。先生が指名してくださり、発言する機会を与えてくださったことで、自分の力を伸ばすことができたのだが、ひとつ心残りがある。それは、私は１度も自分で手を挙げることをしなかったことだ。目立って何か他人から言われることを恐れて、勇気を出すことができなかった。そこが自分にまだまだ足りない「積極性」だと感じた。しかし、中村先生のキャリアについての話を聞いた時、自分の考えや武器をしっかりと持ち、人にアピールすることができると、大手企業での活躍も夢ではないのだと実感することができた。私も後期からは積極的に行動し、キャリアデザインの講義で身につけた「PDCA サイクル」を活かしながら、さらに夢へと近づけてゆこうと思う。

前期に受けた講義の中で最も、今の自分、将来の自分にとても役に立つ重要な講義だったと感じた。将来について考える機会を、そして、夢実現へのヒントを与えてくださって、本当にありがとうございました。

H29 後期定期試験（生命工学部 1 年生）：

① 「キャリアデザインⅠ」の授業は、私を本来の道に連れ戻し、これから先のヒントを与えてくれた。私のしたいことは決まっている。難病に対する特効薬、新薬の開発、または未だ分かっていない体内活動の解明などの、主に研究職系である。特にバイオサイエンスに惹かれ、生命工学部生物工学科に入学した。最初は自分の目標を強く持ち、授業もまじめに聞いていたが、新しい環境に慣れようとする途中、本来の目的である勉強への意欲が薄れてしまった。後期が始まった頃には授業に身が入らず、授業中に寝たり携帯をいじったりと、とても意欲のある生徒がやる行動ではなかった。そんな時「キャリアデザインⅠ」の授業が始まった。私はこの授業を受け、先生のお話を聞いているうちに自分の薄れていた勉強への意欲がフツフツと湧いてきたのを感じた。特に、中村先生の大手企業に面接に行ったときの話には大きく感銘を受けた。優秀な他大学の学生（東京大学）し

か周りにおらず、先生の大学の面接日ではないことを理由に会社の人にも帰るように言われても、自分の強固な意志を貫き見事、入社に合格したという話は本当にすごいと思った。このような方がいるのかと思い、同時に同じ人間なのだから自分も努力し、強い意志を持ち、夢をかなえたいと強く思えた。授業の中で出ていたPDCAサイクルはこれから先のヒントになった。PDCAサイクルはP=計画、D=実行、C=評価、A=改善であり、計画し実行に移しそれを評価し、評価したことから改善につなげるということである。このサイクルはこれから先、非常に重要なものになると直感した。私は早速二つの計画を掲げた。一つは多くの資格を取ること。二つ目は留学をすることである。一つ目の具体的な内容としては、今年中に本来3年生で取得するバイオ中級のテストに優秀な成績で合格し、3年生でバイオ上級のテストに合格する。また国家資格である毒劇物取扱者の資格を取得することである。二つ目の留学であるが、今年中に行うために、今、福山市が募集している留学プログラムに応募することを考えている。

今回、私がこのようにいろいろな事を始めようと考えることのできたきっかけは、「キャリアデザインⅠ」の授業のおかげである。今の気持ちを忘れないで自分の夢のために、努力をおこたらず前進していきます。ご教授ありがとうございました。またお伺いすることがあると思います。その時は是非またご教授お願いします。

② 私はこの「キャリアデザインⅠ」を受ける前と最初の頃まで夢がなくて焦っていましたが、先生の授業のおかげで少し立ち止まって、自分について考え直すことができました。今も焦りはありますが、前ほどではなくなりました。少し立ち止まって考えてみると、私は医療に興味があることを知れました。医療には様々な職業があるので、これからもっと調べていかないといけないですが、私の中では大きな進歩です。まだ漠然とした目標でしかないですが、「キャリアデザインⅠ」で学んだ、ステップ1「今の自分」、ステップ2「なりたい自分（目標)」、ステップ3「目標への道筋」という3ステップや、PDCAサイクルは特に心にとめて、意識しながら、残り3年の大学生活を過ごしていきたいと思います。また先生は授業中に心理学に触れて、「ジョハリの窓」の話をしてくださいました。それは、他人と自分が知っている「開放」の窓と、他人が知っていて自分が知らない「盲点」の窓、他人は知らないけど自分は知っている「秘密」の窓、自分も他人も知らない「未知」の窓があるというものでした。この考え方で考えてみると、自分が知らないことって、意外に多いんだと気づくことができました。この話を聞いて自分で考えることはあたりまえだし、もちろん大切なことではあるけれど、他人に聞いてみることで新しい自分に出会えるかもしれないし、視野が広がるのではないかと考えました。私は、なにか自分のことで悩んだり、つらくなったら、

人に聞いてみることも悪いことではないと知れたのが、嬉しかったです。「キャリアデザインⅠ」の授業のおかげで、心に少し余裕と、もっと頑張ろうと思えることができました。ありがとうございました。

５．文系・理系の学生はどのような『生き方』がしたいのか？

フランスでは幼いころから「哲学」を学ぶ伝統があり、それは『自分らしい生き方』について、豊かな人間性といえる『人間力』への探究心を深め、思考力や洞察力を高めるためのフランス人の叡智であると筆者は考えている。また、フランス、英国、ドイツなど、ヨーロッパの主要国においては、中等・高等教育機関においても、ラテン語とギリシャ語を学ぶことを必須としてきた歴史的・文化的・学問的背景がある。これはとりもなおさず、古典の言語を自己の人間形成への豊かな教養として身につけ、人として実りある『生き方』をすることが、『自分らしい生き方』として自分自身に誇りを持つことができ、豊かな人生として自己の『生き方』を肯定することにつながるからであろうと考える。

H30 前期定期試験、及び、H29 後期定期試験で、「キャリアデザインⅠ」を受験した文系・理系の学生の答案に関しては、学生がどのような『生き方』をしたいのかについて、以下のものを挙げている。

H30 前期定期試験（経済学部１年生）：

① 私は山梨や東京の大学受験に失敗し、福山大学へ入学した。自分が行きたいと望んでいた大学ではなかったため、正直、初めの頃は周りともあまり打ち解けることができず、勉強もとても“熱心”といえる取り組み具合ではなかった。そんな時に出会ったのがキャリアデザインⅠの授業、そして私達をご指導してくださった中村先生であった。キャリアデザインⅠの授業では、「将来について考えること」「短い４年間の大学生活でやるべきこと」「社会人になって必要とされるもの」など、多くのことを教わった。それが私の将来を考え、この４年間をどういったものにしていくかを考えるきっかけとなった。しかし、熱中できるものや、趣味といっていいものがほとんどない私にとって、将来やりたいことを見つけるのは難しかった。そんな私に声をかけて下さったのが中村先生だった。全受講者の前で発表するグループディスカッションの司会、教官と１対１で披露する個人面接という二つの大役の話を持ち掛けて下さったとき、私は驚いた。「何で私が？」という思いだった。しかし、個人面接の練習を通して自信がつき、「日本航空の国際線のキャビンアテンダント」という私の一つの将来像が浮上した。それまで私は「自分が国際線のキャビンアテンダントになるなんて、ありえない」と思って

いた。しかし、中村先生の話を聴いたり、アドバイスを受けて、「自分」を少しずつ改善していくことで、「自分」に自信が持てるようになった。そして、最終の講義で皆さんの前で二つの大役を務めさせてもらった後、とても勇気に満ちた気分であった。「中村先生のおかげでこんなに大きな１歩を踏み出せた」と。それとともに「自分が～なんて」というネガティブな感情を持つことを止めようと思った。先生が勧めて下さった「日本航空の国際線のキャビンアテンダント」という職業が、自分の将来の選択の１つに入った瞬間だった。まだ明確に「キャビンアテンダントになりたい！」と決まった訳ではないが、難度の高いことに挑戦するためには、やはり、この時期の早いうちから対策を取り、将来に向けて努力をしなくてはいけないなと思った。そして真っ先に思い浮かんだのは、やはり PDCA サイクルであった。これを根気よく４年間続けていくことで、どんな将来にも柔軟に対応できるであろう。今の自分にある能力を自覚し、その能力に見合った計画を立て、実行、反省し、そして次へつなげていきたい。福山大学に来たからには、誰よりも知識、経験を蓄え、一人前の社会人になりたい。私に自信を持たせて下さった中村先生、本当にありがとうございました。

② 私の将来像は大学生活でファッションビジネスの能力検定などの資格を取り、ファッションバイヤーになるために必要な、ショップ店員のアルバイトをしておこうと考えています。私が就職したい企業は「CAN 株式会社」というところです。そこで服の買い付けを行ったり、売ったりするバイヤーになりたいです。私は最初キャリアデザインというものは何をして何を学ぶものなのか分かりませんでした。しかし、中村先生の授業を受け、将来何がしたいか、どんな不安があるかなど、大学を卒業した後の社会での必要なことを学ぶことができました。為になったことは沢山ありますが、その中で一番為になったことは二つあります。1 つ目は文部科学省後援のビジネス能力検定です。授業の中で検定の為の勉強の時間をとって下さり、その中でしっかり学ぶことができ、無事検定を受けることができました。結果はまだ出ていませんが、授業で学んだことを出せているかなと思います。資格をまだ大学で取っていない私にはとてもいいことであり、他の資格にも挑戦しようと思うことができました。2 つ目は、キャリアデザインの授業で行ったグループディスカッションと、教官と１対１で全受講生に披露する面接です。グループディスカッションは「社会人になるために何をするべきか」というお題に対して議論しました。私は書記をしましたが、皆の意見を聞きまとめて黒板に書くという作業とともに、自分もそのお題にどう返すかということまで考えて参加することができました。次に面接の練習の発表です。ドアから入る前のノックから最後にドアの所で「失礼致します」と閉めるところまで、授業の空きコマなど

の時間を割き、中村先生と練習しました。この経験は凄く為になりました。まだ1年生なので就職の面接なんて早いと思っていた自分でしたが、他の皆さんより一歩先の準備ができている喜びや、もう一度自分の将来の夢を見直し、明確に大学でやってきた・やっていくことを考えることができ、とてもいい経験でした。中村先生には、グループディスカッションから面接の練習まで、忙しい中、時間を割いて付き合って頂き、お辞儀の際の礼の深さであったり、ノックの回数であったり、企業側の面接官の質問を教えて下さったり、基礎から細かい指導をして下さり、本当に感謝しています。キャリアデザインという授業で、私は将来を見直すことができ、今、何をするべきかを確認し、就職の面接の練習をいち早くし、そして、みんなに発表することができたので、中村先生から学んだ１つ１つのことを忘れず、これからも自分の将来を見つめ直していこうと思います。中村先生、本当にありがとうございました。

H29 後期定期試験（生命工学部１年生）：

① 私は高校生の時から心の奥にパン屋を始めたいという思いがありました。ですが皆に言うのが恥ずかしく無理だとあきらめていました。ですが、キャリアデザインⅠを受けた時、中村先生の言葉が私の心の奥にある夢を、自ら実現しようとする夢に変えてくれました。そして人生設計もある程度決まってきました。まず、パン屋を始めるために経営の勉強を独自ですること、そして、１番大事なパンをつくる技術と知識は、私の入学した生物工学科で学べるので、2 年生では発酵や食品衛生の資格を取るのに必要な知識を学んでいきたいと思っています。そして、3・4 年生ではもっと深い知識を増やし、自分の将来の夢への一歩として頑張っていきたいです。そして、もし自分のパン屋を持ち、ある程度経験と知識、資金を得ることができたら海外に行き、自分の店を開きたいと思っています。

② この授業の中で心に残った言葉は数多くある。「“Time is Money.　時は金なり」、「PDCA サイクル」などである。将来の「なりたい自分（目標）」と「今の自分（現状）」を正しく認識し、現状から目標に辿り着くための道筋や手段を考えてから行動することは大切なことだと思う。P：計画、D：行動、C：評価、A：改善の PDCA サイクルを大切にして将来について考え行動し、実行し反省をすることで少しでも自分のやりたいことを見つけていきたいと思う。また PDCA サイクルは学生のうちだけでなく大学を卒業した後も役に立つと思うので覚えておきたい。もう一つキャリアデザインⅠの授業で良かったと思う事がある。それはグループディスカッションだ。私は見知らぬ人の前で話すことが苦手だった。自分の意見なんて今まではほとんど言えたことがなかった。しかし、このキャリアデザインⅠの授業の中で行ったグループディス

カッションのおかげで、少しずつであるが話せるようになった。たった 30 分間のリハーサルを 3 回行っただけで、自分から手を挙げて発言ができるようになった。本当に大きな一歩だと思う。最初は友達に誘われて、中村先生にも背中を押してもらってやっただけのことだった。でも、その小さな一歩を踏み出すことができたことで、こんなにも変わることができ本当に感謝している。最後になるがこのキャリアデザインⅠの授業を通して、今までは知らなかった自分に出会えたこと、そして自分の将来についてしっかりと考えることができて本当に良かった。また他学部で一見関係ないと思われがちな経済学研究会において、中村先生の論文の講演を聴いたことにより、より一層将来に対する考え方、自分の将来像について見つめることができたと思う。今までの私は夢も将来像もなかったが、今の私は違う。どんな職業、職種につくかまでは正確に決まっていないが、福山大学で過ごす 4 年間で管理栄養士の国家資格だけではなく、少しでも興味のある資格の取得を目指したいと思う。そして 4 年後の卒業の際、自分で自分の将来の選択肢を減らすことのないように、キャリアデザインで習った PDCA サイクルを始め多くのことを思いだし、前に進んで行こうと思う。

６．好きこそ物の上手なれ（人生の１つの哲学）

好きな事にはおのずと熱中できるから、上達が早いものだ。大学時代、自分の好きな事を「自己の強み」に置き換え、それが「社会的強み」とどのように関係し、どのような伸ばし方があるのか、探究してみよう。

自分の強みを将来、社会で活かすことができれば、いきいきと仕事をすることができる。自分の強みは、大学時代のさまざまな経験を通して伸ばすことができる。先ずは自分の得意分野を理解し、そして、その事が「自分を知る」「社会を知る」「自分と社会の接点を知る」ことにどのようにつながるのか、さらに、社会から必要とされる人的資源として、大学時代に伸ばせる「社会的強み」とはどのようなものか、探究してみよう。

【自己コントロールの伸ばし方】

自己コントロール力とは、社会生活の中で自分自身の気持ちや行動を制御する力のこと。積極的に物事に取り組み、慣れない環境にもスムーズに自分を適応させたりする取り組みでさらに伸ばすことができる。ときには、少々レベルの高い課題を自ら課して、困難や嫌なことがあっても、粘り強く対処する力を鍛えるような意識も必要。具体的には、「意欲」「自主性」「適応力」「自己統制力」「ストレス耐性」「持続力」がある。

【対人関係力の伸ばし方】

対人関係力とは、積極的に周りの人たちとかかわろうとする力のこと。これを伸ばすには、相手の言いたいことや感じていることを理解し、それを常に意識した上で行動する心がけが求められる。さまざまな年代や価値観の人と接し、相手の意見を受け入れながら、自分の考えもわかりやすく相手に伝える努力が必要。具体的には、「協調性」「共感力」「発言力」「説得力」「指導性」を指す。

【社会的な態度・能力の伸ばし方】

社会的な態度とは、社会で活躍する上で求められる、物事への取り組み方や姿勢のこと。日頃から世間のことに関心を持ち、疑問に思ったらすぐに調べたり、改良点を考える姿勢がスキルを高める。幅広い情報を集め、現実的かつ合理的なやり方で新たな課題に対処する取り組みを繰り返すことで、活躍の場は広がっていく。具体的には、「創造的態度」「現実的態度」「情報収集力」「論理性」「規律性」「国際生」である。[3]

H30 前期定期試験、及び、H29 後期定期試験で、「キャリアデザインⅠ」を受験した文系・理系の学生の答案には、「自分の好きなことをどのように伸ばし、自己の将来像を目標に、どのようにキャリア構築していくのか」について、以下のように、学生が真摯に論述している。

H30 前期定期試験（経済学部 1 年生）:

私は、将来、市役所の職員になりたいと思います。そのために中村先生がキャリアデザインⅠで教えて下さった PDCA サイクルに沿って考えたいと思います。この PDCA サイクルは、計画、実行、確認、そしてもう 1 度行動を改善して起こすという素晴らしいサイクルだと思います。先ず、計画という部分についてです。私は正直なところ、キャリアデザインⅠの授業を受ける前は自己の将来像についてしっかりと考えていませんでした。しかし、この授業のおかげで主体性や積極性について深く考える事ができました。だから、積極性を持ち、市役所の職員になりたいという夢を持つことができるようになりました。本当にありがとうございます。そして、夢を持って計画を立てるために自分を知ることを始めました。私の性格は、優しさを持ち、人の話を真剣に聞き、アドバイスすることができるというのが、長所（私の好きな事）なのかなと思いました。その長所を伸ばすため、いろんな人と関わっていこうという計画を立てました。具体的には、友人を積極的につくったり、様々な先生と会話をさせ

[3] 福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career Design Note Ⅱ Fukuyama University』福山大学キャリア形成支援センター,P.26-27.

てもらったり、また、アルバイトを接客する内容のものにすることで、関わりを増やしていこうとするものです。そして、実行し始めました。まだ、２、３ヶ月しか経っていないので、正直次の確認という段階には至っていません。しかし、中村先生がおっしゃった“Time is Money.”という言葉は、私が生活する中で、とても心に刺さっています。時間という皆平等に与えられたものを、私は有意義に使っていきたいです。そして、私は自分なりに考えてみたところ、皆というのは、やはり、社会というものだと思います。ここで、また中村先生の尊敬する言葉が出てくるのです。それは、自己を知り、社会を知る、そして自分と社会の接点を知るということです。そうして自分の中でも、社会からしても大変有意義だと思うことを大学生活で行っていきたいです。このような人生についての考え方を教えて下さった中村先生には感謝しております。「キャリアデザインⅠ」という授業は、やはり素晴らしい授業です。しかし、あまり説得力のない先生に教えてもらったとしても、私の心には、こんなにも響いてはいなかったと思います。入社試験の時の中村先生のお話は、本当に輝いていて、私も自信を持って話すことのできる２年後にしたいと思います。２回目にはなりますが、本当に中村先生ありがとうございます。来年にも、私と同じような学生が福山大学へ沢山来ると思います。夢を持っていなくても、「キャリアデザインⅠ」を受けて、考えることで、必ず、夢を持てると私は信じています。もし、まだ福山大学と決めていなくても、中村先生の「キャリアデザインⅠ」があるから来るべきだという程、素晴らしい授業です。あっという間に過ぎてしまった「キャリアデザインⅠ」の授業ですが、驚くほど、濃い内容の授業でありました。私の足踏みしていた人生は、しっかり歩き始めたと実感しています。私の将来像はもやもやとしていましたが、今は、くっきりとしてきています。力が入りすぎていて、字が汚く申し訳ございません。最後に、「キャリアデザインⅠ」の授業を受けることが出来て本当に良かったです。ありがとうございます。この「ありがとうございます」という、日本語で最も美しい言葉を、私はいろんな人にこれから言うことができるように、多くの探究心を持ち、絶対に感謝の気持ちを忘れません。何回も言ってしまってくどいかもしれませんが、本当に中村先生のおかげです。ありがとうございます。私の人生観が変わりました！　将来、何かの形で恩返しがしたいです。

H29 後期定期試験（生命工学部１年生）：

私は小学６年生の頃から料理をすること、お菓子をつくることが好きで、将来は食に係る仕事に就きたいと思っていました。母に管理栄養士の仕事があると教えてもらい、お金の面で選択したのが県立大学です。しかし、高校３年生の１月のセンター試験でおもうような結果が取れず、私立を選択せざるを得ませんでした。私立の某医療福祉大学は、私が合格できるギリギリのラインだったので福山大学も受験することに

しました。結果は福山大学には合格、某医療福祉大学には補欠合格でした。両親と話し合い、学費、交通時間、私の学力を考えて福山大学への入学を決めました。この時、私は悔しい気持ちでいっぱいでした。私の高校は進学校で周りの友達はほとんどが国公立に合格していましたので。そして私はどうしてもレベルの高い大学に合格したく、両親に頼み、２ヶ所塾に通わせてもらい、平日は放課後から 22 時、休日は朝８時 30 分から夜９時まで毎日勉強していたにもかかわらず、このような結果になってしまい、両親に申し訳ない気持ちと、悔しい気持ちでいっぱいでした。そこで私は思いました。大学で１番になろうと。そして沢山のことにチャレンジし、いい職場について高校の同級生を見返してやろうと。そして私は入学し、前期の授業を一生懸命頑張りました。分からないところがあれば、友達や先生に質問したり、レポート課題が出たら、教科書だけでなくネット、さらには図書館に行き本を借りて調べ、学習を重ねてより良いレポートを完成させるようにしました。前期が終わり、私は気づきました。私は将来の夢はあるけれど具体的には決まっていないことが。そこで１年生の夏休みに福山市役所の学校保健課にインターンシップに行かせて頂いたり、ボランティアに参加させて頂いたりしました。それでも私は「これだ」と思えるような仕事を見つけることができませんでした。そんなことを考えているうちに早くも後期の授業が始まってしまいました。そこで私が出会ったのが「キャリアデザインⅠ」という福山大学独自の授業で、「なりたい自分（目標）」と「今の自分（現状）」を正しく認識し、「現状」から「目標」に辿り着くための道筋や手段を考えていくことをしました。キャリアデザインには３つのステップがありました。第１ステップは「今の自分」を把握すること。自分の強みや弱み、自分らしさとは何か？そんなことを冷静に分析していきます。私は自分のことについて振り返ってみたことがありませんでした。しかし、この授業で出された課題をやって発表していくうちに、私は料理や、お菓子づくりが大好きで、1人でいるよりも友達といると元気になり、体を動かすことが大好きで、何に対しても誰にも負けたくないという負けず嫌いなところがあることが分かりました。またその半面、何に対しても負けたくないとすぐに燃えますが、無理だと思ってしまったらすぐに諦めてしまう所があることも分かりました。そして第２ステップとして「なりたい自分」を見つけること。自分は何がしたいのか？自分は何に向いているのか？について探究することです。私は「キャリアデザインⅠ」の授業の最終日に、受講生全員の前で、中村先生と１対１で、私の面接の受け方を披露させて頂きました。私は小学校、高校の受験時に面接は受けていたので余裕だと思っていました。しかし、それは間違っていました。学校受験の面接と、就活の面接とでは、行動も、話す言葉も違い、私は皆の前で発表できるのか不安でした。しかし、中村先生がサポートして下さったおかげでやり抜くことができました。この経験はとても大きな力になったと思います。このときの面接で話したことを受け、もしかしたら私は学校に係る仕事（小学校の食

育の教師）に就きたいのではないかと思うようになりました。学校で働くためには教員の資格も必要となるので、今受けている教職の授業も頑張ろうと思います。そして最後に第３ステップは、現状から目標への手段を見つけ、道筋を設計することが大切です。私は「キャリアデザインⅠ」という授業でPDCAサイクルという言葉を習い、このサイクルを行うことで第３ステップを乗り越えたいと思います。この「キャリアデザインⅠ」を受けることで、とても沢山のことを学びました。中村先生が口癖のように言っていた「Time　is Money.(時は金なり)」。私は本当にそうだと思います。今という時間を大切にし、このキャリアデザインの最後の授業でさせてもらったグループディスカッションの司会、教官と１対１で行う面接試験、とても緊張しましたが、皆の前で発表するという自信と力がつきました。このように１秒１秒を大切にし、日々成長し、見事、国家試験に合格し、自分の夢である管理栄養士になり、沢山の人々を笑顔にさせられるような人になりたいと思います。

７．文系・理系の大学生の「特性」と「社会的意義」の考察

１）文系・理系の学生の「特性」に関し、最も大きな違いは、社会が評価し、その必要性を求める「専門性」である。筆者は法学部を卒業したが、法学部を卒業した同窓生の中で、法曹界に進出する人は非常に少ない。福山大学経済学部においても、自分の専攻分野の専門知識をそのまま活かせる職業に就くことは限定的といえる。

一方、理系の学生は、例えば工学部建築学科卒の学生は、建設会社や、設計事務所、さらに住宅関連メーカーなどに就職することとなり、「1級建築士」「2級建築士」の資格取得も含め、大学で学修した専門知識が直接的に必要な職に就くのである。また、理系の学生は大学院への進学率も高く、将来研究職に就く学生も多い。

福山大学においては、これまで主に工学部の学生については、就職に関して、研究室の指導教員の推薦が、直接就職先につながるケースも見られ、専攻分野や専門知識が就職先につながるケースは、文系より一段と多く濃い関係になっている。

２）次は文系・理系の違いとして、ITとの関係の深さが挙げられる。今の時代、文系の学生もIT機器を使用できなければ社会で通用しない、仕事の上でも大きな支障をきたすことになるが、例えばシステムエンジニアなどのITの専門家になるためには、本学工学部情報工学科で専門知識を身につけることが必要となり、他の理系の学科においても数値データ処理等にIT機器を駆使できる能力が社会から求められる。企業が理系の学生に期待するIT関連の能力は、文系学生よりも質的に高いものといえよう。

３）次は、大学教育システムの違いが文系・理系の間にあること。国公立大学を中心に、理系の学生は大学院修士課程に進学する傾向が高い。東京大学、東京工業大学等

では、9 割以上が大学院に進み、修士で就職する者が多い。将来研究職を希望する者も多いため、修士修了の条件が必要とされる社会的背景がある。[4]

４）次に、「数学的能力の優位性」が挙げられる。昨今、経営コンサルタントの職務が有名大学生に人気があるが、コンサルティング企業では数値データやビッグデータを分析し、将来の予測値やシナリオを予想する仕事が多いことから、文系より理系の学生を好む傾向が見られる。コンサルティング企業においては、コンサルタントの仕事が経営的課題に対し､例えば人事部の業務として IT システムに係ることがウェイトを占めるため、IT の専門知識を持ち、数学的・数値的な能力に長けた理系の学生を好むのである。

５）語学力、その中でも英語力・中国語力等については、比較的文系の学生が得意とするところである。筆者は、本学への入学を希望する高校生に対し、これまで各種面接試験に臨んできたが、高校時代の得意科目として、「英語」と「数学」を同時に挙げる高校生には会っておらず、また、必修科目「キャリアデザインⅠ」の授業においても、これまで理系の学生で英語が好きで得意と聞いたことはあまりない。

企業においても、具体的には、楽天の「英語の社内公用語化」宣言は、日本社会に大きな衝撃を与え、世界の最高学府ハーバード大学の経営大学院においても、日本企業の事例を研究する上で、関心の高い研究テーマとなっている。総合商社トップ企業の三菱商事㈱においては、以前、社員に TOEIC は 800 点以上、併せて、新入社員時に中国語を受講することも求められていた。総合商社は、依然、文系学生の上位人気企業である。一方、理系の学生については、技術職としての専門知識があれば、商談においても、業界の専門用語を使い、簡単な英語で話しが通じ合うことも多いので、企業や社会から理系の学生に対しては、「英語力」より、やはり「専門性」が強く求められるのであろう。

８．国際社会の動向に揺れる日本の大学教育

2015 年 6 月 8 日、下村博文文部科学相(当時)は、全国の国立大学法人に対し、第 3 期中期目標・中期計画（2016～2021 年度）の策定にあたって教員養成系や人文社会科学系の学部・大学院の廃止や転換に取り組むことなどを求める通知を出した。通知の問題部分は次の通りである。

[4] 増沢隆太(2014),『理系のためのキャリアデザイン戦略的就活術』丸善出版,pp.12-14.

教員養成系と人文社会科学系については、18 歳人口の減少などを理由に、組織の廃止、社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう要請、司法試験合格率が低迷する法科大学院についても、廃止や他の大学院との連合など「抜本的な見直し」を求めた。

この通知の表現が、海外の日本に関する研究者、日本に相当数いる外国人大学教員に刺激を与えた。そのことが海外のマスコミによる報道を通じ、研究者それぞれの不信感や憤りを越えて、海外に所在する日本研究の学会や、日本研究その他の人文社会系の研究者、及び、専門職団体を巻き込み、文科省の「廃止案」に、「外圧」として抗議声明を出すに至ったのである。[5]

翻って欧米の最高学府といえる有名大学を洞察すれば、今日、世界大学ランキングが広く参考にされる国際社会において、「大学教育のグローバル化」という視点に関し、日本の大学教育に関する政府の姿勢に偏りが見えてくる。

さらに、フランス、イギリス、ドイツなどのヨーロッパ主要国においては、歴代、高等教育機関において、古典言語のラテン語、ギリシャ語を学んできた。これは、単に言語能力の視点にとどまらず、大学、大学院等の卒業後、将来の知的社会人・知的教養人を育成し、各国を背負う知性豊かなリーダー的人材の輩出を目指しているのである。歴史的に、古代ギリシャは、民主主義、ギリシャ哲学、ギリシャ神話、ギリシャ悲劇、オリンピックが生まれたヨーロッパ文明発祥の地であり、新約聖書は学識ある者が使うギリシャ語で書かれている。ラテン語は古代ローマ人の用いた言語であり、この古典ラテン語は中世、近世を通じて学術語ならびにローマ教会の典礼用語としてヨーロッパ文化を担った。この二つの学術的言語は、その広範囲な影響力の大きさから、現在の世界の共通語、英語に匹敵するものといえよう。

これは何を日本人に問いかけているのであろうか。

9．おわりに

現在、高校卒業後、大学・短期大学への進学率は 50%を超え、大学は「全入時代」を迎えている。この「全入時代」に大学に入学してくる学生達は、高い向学心や志、そして目的意識や思考力・行動力を備えて進学してきたとは言い切れないのである。ここに「全入時代」を迎えた、日本の大学教育についての課題が浮上してきたといえる。日本社会の少子高齢化、人口減少、特に 18 歳人口の減少に直面している日本の大学間では「生き残り」をかけて、入学者の増加に熾烈な競争を展開している。

---

[5] 苅谷剛彦(2017),『オックスフォードからの警鐘－グローバル化時代の大学論』中公新書ラクレ,pp.79-80.

このような社会的背景の中で、現在、大学は入学してくる学生達の「生き方」や「価値観」の多様化に直面し、学生の学力格差や希望格差、夢・目標の欠如、主体性・協調性・自立心の欠如などに、どのように対処したらいいのか善処できず、これが喫緊の課題になっている。

もう一つは、日本の政治・経済・社会が、世界の「グローバル化」へ一段と加速していることである。このグローバル化への歩みは、日本の文系・理系の大学生の「生き方」や「価値観」にも大きな影響を与え、企業経営者や社員の既成概念、雇用マーケットなどにも様々な変化をもたらしている。

このように「全入時代」の日本の大学を取り巻く社会環境や世界は、ICT 革命（情報通信革命）が想像を超えるスピードで日増しに変化していくグローバル社会であり、この 21 世紀のグローバル社会が大学生に求める「生きる力」は、まさに目まぐるしい変化と多様性に適応できる能力、他者と価値観を共有できる寛容さと柔軟性、そして、他者との協働性、さらに「個」の「生き方」を大事にする自律的能力といえよう。

このような社会の移行期に、日本の文系・理系の大学生に求められることは、将来の知的社会人を目指し、大学における学びを通して、文系・理系の「双方の特性」の良さを意識して、互いに「双方の強み」を少しでも取り入れていく形で、バランスの良い自己の「人間形成」・「人間力」の向上を目指し、それぞれの高度な専門知識を身につけ、思考力・発想力・技術力・行動力を高めるためのスキルアップを常に怠らないことである。すなわち、卒業後の自己の未来を切り開くために、そして、豊かな人生へのキャリア構築のために、学生一人一人が自分の力でイノベーションを起こす、「スピリット・イノベーション」（自己の意識改革）が肝要である。[6]

福山大学においては、H30 前期定期試験で必修科目「キャリアデザインⅠ」を受験した経済学部 1 年生全員の解答用紙、並びに、H29 後期定期試験で同科目を受験した生命工学部 1 年生全員の解答用紙からも理解できる通り、この授業を受けたことで、自己の将来像への夢・目標について、自らの意識や考え方が大きく変化したことが記されており、自分自身、これからの大学生活、社会進出に向けて、今、何をすべきか、社会は何を学生に求めているかを真摯に自覚し、これからは能動的に自己のキャリアデザイン（人生設計）に真摯に取り組み、着実に行動を起こしていることが明記されている。

この経済学部と生命工学部の 1 年生が、本学の上記定期試験で解答した論述内容の事実が、この論文のテーマである「文系・理系の大学生のためのキャリアデザインの考察と社会的意義」の証左といえる。

---

6 中村博(2018),「大学生のためのキャリアデザイン(人生設計)とキャリア・カウンセリングの社会的意義」『福山大学経済学論集』第 42 巻第 1・第 2 合併号,pp.81-82.

参考文献

［1］中村博(2018),「大学生のためのキャリアデザイン(人生設計)とキャリア・カウンセリングの社会的意義」『福山大学経済学論集』第 42 巻第 1・第 2 合併号
［2］福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career　Design　Note　Ⅰ　Fukuyama　University』福山大学キャリア形成支援センター.
［3］福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career　Design　Note　Ⅱ　Fukuyama　University』福山大学キャリア形成支援センター.
［4］増沢隆太(2014),『理系のためのキャリアデザイン戦略的就活術』丸善出版.
［5］苅谷剛彦(2017),『オックスフォードからの警鐘－グローバル化時代の大学論』中公新書ラクレ.

Consideration and Social Significance of Career Design for University Students in Arts and Sciences

Hiroshi Nakamura

Abstract

In Fukuyama University there is a compulsory subject named　“Career Design Ⅰ” that have to be learned by all freshmen as the first year’s education of this university. The teaching-aim of this compulsory subject is to bring up students’ abundant human nature and to cultivate the foundation of a member of society in future.

In the class of a compulsory subject of　“ Career Design　Ⅰ”, students of Fukuyama University systematically learn the contents of a designated textbook, named　“Career Design Note Ⅰ －Fukuyama University”, made by Fukuyama University with subsidies from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

Furthermore ,to obtain good results of the teaching-aim and to raise students’ motivation, dialogue, case study, questions and answers, presentation based on Work of the textbook, and group discussion are positively introduced as the method of　“Active-Learning”.

As a result almost all students feel actually that “A Lifestyle” of each student is

changing from meaningless and useless one until now to a new lifestyle that has a sense of purpose and significant time every day. Therefore, almost all students are so surprised that they are starting to walk toward self-realization. And they are very pleased with this great change.

The above-mentioned matter can be verified by the examination papers of sum total 467 freshmen of Faculty of Economics and Faculty of Life Science and Biotechnology who took an examination of the required subject of "Career Design Ⅰ"during the first semester examination term in 2018 and the second semester examination term in 2017 of Fukuyama University.

We consider that differences in the characteristics of students in the arts and sciences are as follows. Companies are seeking more expertise from students in sciences than from students in arts. In the meantime the expertise of students in arts does not directly reflect the ability to suit the employment of the company. In other words the relationship between the expertise of students in arts and the employment of the company is weak.

With the above-mentioned examination papers, we can also understand that these freshmen of Fukuyama University could firmly realize for their own selves that it is most important for them to make oneself who can challenge each small goal step by step in order to become an independent member of society, making the best use of PDCA- cycle toward their dreams and aims in future.

With these facts, we consider that it is evident that career design for university students in both arts and sciences is clearly significant socially.